

「代受苦」表現の諸問題

龍谷大学実習助手

金 澤 豊

- 0、はじめに
- 1、苦の認識
- 2、代受苦の起点
- 3、大悲心の作用
- 4、菩薩の「忍」
- 5、代受苦の類似概念
- 6、おわりに

0、はじめに

大乘仏典の主人公としての菩提薩埵（*bodhi-sattva* 以下、菩薩）は、釈迦の本生としての本生菩薩、悟りへの道を歩む向上性と、衆生を救済する向下性の3種に分類できるという¹。中でも、向下性をもって菩薩が人々の苦しみを代わって引き受けるという志向性は「代受苦（*duḥkha-udvāhana*）」と呼ばれてきた。

古くは金子大榮が、受苦と随喜について考察し回向の意味を述べる中で「代受苦」について次のような指摘をしている。

受苦とは菩薩が一切衆生の受くべき苦を代わりて受けんとすることである。随喜とは一切衆生のあらゆる善に対して、みずからなせるものの如く喜ぶのである。この両者は全人的自覚なしには行われない。すなわち代受苦という事は個人的の立場ではまったく不可能であることは明らかであるが、随喜ということも利己心を離れざるものには到底不可能のことであ

る²。

菩薩の行為とみずからの行為という主体の違いを見立てて「代受苦」が「随喜」とは違い個人の立場、すなわち私たち衆生の個々の思いによって実現することは不可能であると述べている。また、代受苦の主体が誰で、何を対象とし代わりに苦を引き受けるのかということについて、『望月佛教大辞典』には「代りて苦を受くるの意。また大悲代受苦、大悲受苦、或いは略して代苦とも称す。即ち菩薩が大悲心を以て衆生に代りて悪趣の苦報を甘受するを云ふ」とあり、菩薩が主格、救済の対象が衆生であることを複数の経論を根拠に示している。一方、『中村元著 佛教語大辞典』では「他人に代わって苦しみを受けること。菩薩の大慈悲心についていう。大悲代受苦ともいう」とし、菩薩の大慈悲心であることと並んで、主体がやや不明瞭な「他人に代わって苦しみを受けること。」という記述がある。根拠として複数の仏典の他に『沙石集』が挙げられており、インド成立の仏典から日本の仏教説話に至るまで「代受苦」が用いられていることがわかる。

さて、その「代受苦」説が近年メディアで頻繁に報じられている。東日本大震災（2011年3月）直後から、頻発する自然災害や新型コロナウイルスによる非業の死者を「代受苦の人」と呼び「代受苦」を使用する記事がしばしば見られる。この言説は一定の共感を生み遺族をはじめ現代の苦難に直面する人々にとって、ある種の救いとなっているのである。一方で、声なき死者に「代受苦者」という名付けを与えることは妥当なのかという疑問も残る。それでも、インターネット上でのヒット数からも「代受苦」認知は確実に広がっていると言えるだろう³。このような災禍の死者を「代受苦者」と名づける現象をどのように理解すべきなのだろうか。

これまで筆者は仏教用語としての「代受苦」が現代において曖昧に用いられていることに注目し、その起点を漢訳仏典から探ってきた⁴。本稿では、さらに漢訳仏典における「代受苦」表現を中心に苦の認識から代受苦の周辺概念を検証し考察を加えたい。

1、苦の認識

ブツダの四諦八正道説の構造からも知られるように「苦」を正しく見据え滅することは仏教徒にとっての身近で究極の目標であった。それはさらに「抜苦」として示され、思い通りにならない「苦」を取り払う主体は、疑いなく修行を重ねて心を調伏する修行者自身であった。

大乘仏教においても苦の検討は当面の課題であり続けていたと考えられる。『大品般若経』の詳細な注釈『大智度論』では「抜苦」が菩薩による「大悲」によって実現されると説いている⁵。つまり、苦を抜く主体が「自ら」から「菩薩の所業」へと変化を認めることができる。

また、瑜伽行派の基本典籍であり4世紀ごろに作成された弥勒作『瑜伽師地論』菩薩地 (*BodhisattvaBhūmi*) からの影響が見られる無着作、玄奘訳『顕揚聖教論』には、すべての感受が苦であるという苦の定義が見られる。修行階梯のレベルに応じて克服すべき苦のリストが挙げられており、苦の克服について大乘仏教では、すべてを菩薩に仮託していたわけではないことがわかる。もちろん苦を甘受し克服する主体を空と観じるのか、それとも実有と認識するのかの違いはある。いずれにせよこれらのことから、苦悩の認識と生成過程ならびに分析、克服方法は統一的ではなくても広く大乘仏教徒の課題であったと言えるだろう⁶。このような大乘仏教の典籍において、代受苦とその類似概念は誰の苦を誰が受け取り、どう克服するのかを明らかにしたい。

2、代受苦の起点

まず、辞書類に示される典拠から「代受苦」と漢訳される用例が多くないことに気づかされる。SAT 大正新脩大蔵経データベースによってヒットする『大正新脩大蔵経』(以下、大正蔵)中の「代受苦」の文字列は59箇所である。うち漢訳仏典は9典籍に13箇所存在する。訳出年次が詳らかでないものもあ

るが、先行研究を頼りに記録されている翻訳年代順に並べると次のようになる。

- ① 412年 竺仏念訳『菩薩處胎經』一箇所（大正蔵 12、p.1038 b）
- ② 419年 曇無讖訳『悲華經』一箇所（大正蔵 3、p.212 c）
- ③ 419年 曇無讖訳『菩薩地持經』一箇所（大正蔵 30、p.928 a）
- ④ 419年 竺難提訳『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經』一箇所（大正蔵 20、p.36 b）
- ⑤ 418～420年 佛馱跋陀羅訳『華嚴經』二箇所（大正蔵 9、p.489 b、p.748 c）
- ⑥ 5、6世紀 竺仏念訳『菩薩瓔珞經』三箇所（大正蔵 16、p.51 c、p.56 a、p.112 c）
- ⑦ 7世紀前半 輸波迦羅訳『蘇婆呼童子請經』一箇所（大正蔵 18、p.729 b）
- ⑧ 648年 玄奘訳『瑜伽師地論』一箇所（大正蔵 30、p.537 a）
- ⑨ 713年 菩提流志訳『大宝積經』二箇所（大正蔵 11、p.450 c. line 16、19）

①と⑥の翻訳者は同じ竺仏念だが⑥は中国撰述の偽經と認められており成立年を後置した。また、②～⑤の訳出は418年～420年に集中し厳密な前後関係の特定が難しい。⑦は7世紀前半、⑧は同じ頃648年に漢訳された記録が残っている。⑨は訳者の没後713年に全体の翻訳と編集が完了している。

なお、浄土教の系譜では源信の『往生要集』に1箇所用いられていることが確認できる。これは、密教部に収められる④竺難提訳『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經』に含まれる陀羅尼の一部を引用したもので、先述の仏教辞典の各種に『陀羅尼經』の典拠とされる偈文である。

このように、データベース検索によって使用例の少なさと、5世紀初頭の漢訳仏典に「代受苦」文字列が集中して使用されていることがわかる。先行研究でも、経典には使用例が少なく、経疏や論書の類が作成された段階においてそ

の概念が意識されるようになり、ある程度熟した術語として用いられるようになったと指摘される⁷。よって、菩薩の多様な働きの一つとしての「代受苦」は大乗經典成立の時期に定説ではなかったという説も導き出せる。もちろん「代受苦」という文字列でなくとも、単に苦を受ける「受苦」という表現は9584件、「忍苦」は431件と阿含部から中国撰述の注釈書に至るまで万遍なく使用例があり、「代受苦」は術語としての認識が広がっていないことが推定できる⁸。先の金子大榮は「受苦」と「代受苦」を等しく考えているが、単に苦を受けることと、苦を代わって受けることとは意味が異なる⁹。前者は状態を示す言葉として用いられ、後者は、菩薩が主体となり衆生に「代わって」を意味していた。

次に、代受苦の文字列に限らず「代受」の前後に「苦」や「苦惱」の文字が現れる仏典を見ていきたい。

3、大悲心の作用

『大品般若経』は、鳩摩羅什によって403年に漢訳されたもので、前項で挙げたりすとより先行して成立している。十地の菩薩が第二地において備える八法が紹介される流れで大悲心に言及する。「大悲心」とは、人々が涅槃に入るために菩薩がその人々の代わりに長いあいだ地獄の苦しみを受ける振る舞いであると明示している。また、そのような行為を「忍苦」とも呼んでいることがわかる。

いかんが菩薩、大悲心に入る。もし、菩薩、かくの如く念ず。我れ一一の衆生のための故に、恒河沙にも等しい劫の如く、地獄の中で 懃苦を受く。そのように是の人、佛道を得て涅槃に入るならば、かくの如きを名づけて一切の十方の衆生のために忍苦をなすと。是れを大悲心に入ると名づく¹⁰。

注釈書の『大智度論』該当箇所は次の通りである。

大悲心に入るとは、先に説いた如く。此の中で佛自ら説く。大心の本願するは衆生のための故なり。所謂、一一の人のため故に、無量劫において地獄の苦を代わりて受ける。乃至、是の人に功德を行じ、集め、佛と作しめて無餘涅槃に入らしむ¹¹。

『大品般若経』で地獄の中で「受勤苦」とされていた箇所は、『大智度論』に忠実に注釈され著者は「代受地獄苦」と理解している。菩薩が衆生のためにという方向性は明確で、功德を行い、集め、悟りの世界（無余涅槃）へ衆生を導くという具体性を示している。ここは、鳩摩羅什の訳語として「代受苦」を抽出することはできないが、大悲心と代受苦思想を結びつけているという点で興味深い。ほぼ同時代に漢訳された⑤佛馱跋陀羅訳『華嚴経』にも、大悲心と代受苦を結びつける例があるからである。

『華嚴経』「離世間品」第三十三に、菩薩摩訶薩の特性として10種類の普賢心が備わっているという紹介がある。普賢心の筆頭が一切の衆生を救護する大慈心で、第2番目が大悲心である。「大悲心を発す。一切衆生に代わりて一切の苦毒を受くるが故に」（大正蔵9巻、p.634c）と特徴が記される¹²。つまり、全ての人々の苦毒を受け取ることが大悲の心であり、菩薩摩訶薩にはその大悲心が備わっているという説である。大悲の定義として「衆生の苦毒を代わりに受け取る」意味が明らかにされている。

両書に通底している菩薩の目的は衆生の般涅槃のためであり、菩薩の大悲の働きとして衆生の苦を引き受けているということである。ゆえに、大悲心の作用の一つとして代受苦のはたらきがあると言えるだろう。

4、菩薩の「忍」

『大品般若経』では、菩薩が大悲心に入ることの意味に「忍苦」をな

すという言い換えが見られた。菩薩による「忍」に視点を移すと『無量寿経』中の法蔵菩薩による四十八願のうちの最後の願「得三法忍の願」が想起される。その願の後には、無量寿仏の国土の様子を描く場面が続く。仏国土の道場樹を見て、その枝葉の音声を聞くものは「深法忍」を得て不退転に住するという表現がある。「忍」が菩薩にとっていかなるものなのか、第四十八願から追って見てみたい。

たとえわれ仏を得たらんに、他方国土の諸菩薩衆、我が名字を聞きて、即ち第一、第二、第三法忍に至ることを得ず、諸佛の法において、すなわち不退転を得ることあたわずは、正覚を取らじと¹³。

法蔵菩薩は第48番目最後の願として、他方世界の諸仏が名号を聞いて帰依し精進すれば3つの忍を得て、決して退転することがないという願いを立てた。第四十八願は「衆生に関する願」に分類ができ、他方国土の者に関する願の一つとされ、同じ「衆生に関する願」に分類される第三十四願にも阿弥陀仏の名を聞くことで衆生の得忍が誓われている。両願文は『無量寿経』の原初形態では説かれず、『般若経』や『華嚴経』と教理的に関わりが深く、現存の形に至る成立過程の中で新たに追加されたもので大乘菩薩思想の発展に基づいた願文と指摘されている¹⁴。

微風やうやく動きてもろもろの枝葉を吹くに、無量の妙法の音声を演出す。その声流布して諸仏の國に偏す。その音を聞く者は深法忍を得て不退転に住す。佛道を成るに至るまで、耳根清徹にして苦患に遭わず。目にその色を觀、耳にその音を聞木、鼻にその香を知り、舌にその味を嘗め、身にその光に觸れ、心に法を以て縁ずるに、一切皆甚深法忍を得て不退転に住す。佛道成るに至るまで、六根は清徹にして諸惱患無し。

阿難、もし彼の國の人天。この樹を見る者は三法忍を得る。一つには音響忍、二つには柔順忍、三つには無生法忍。これみな無量壽佛の威神力のゆ

えに。本願力の故に、満足願の故に。明了願の故に。堅固願の故に。究竟願の故なり¹⁵。

願文の後に続いて無量寿仏の偉大さを讃え、法蔵菩薩が至った西方の安樂国という国土の道場樹に見えることを阿難に伝える箇所である。不退転に至るための「深法忍」とは三法忍のことで、これらは無量寿仏によってもたらされるものであるという。「音響忍」は仏の教えを聞いて得るさと、「柔順忍」は自ら思惟して道理に順い得るさと、「無生法忍」は差別のとりわれを離れて法の真実になうさと理解できる¹⁶。ここで重要なのは、「忍」がさとりに至るために複数あることよりも、菩薩や衆生といった、さとりに至る以前の人々が得るものであるという点である。諸々の「忍」が備わることで人天は不退転の位に辿り着き、六根の悩み患いがなくなると言われている。第四十八願もそれに続く道場樹の莊嚴に関する箇所でも3つ忍を得ることによって人天が不退転の境地に至ることが示されている¹⁷。

『無量寿経』における「忍」は仏力によるもので、それを会得する事は菩薩や衆生が不退転の境地に至るための条件とも言える。『大品般若経』の菩薩が大悲によって衆生を救済する「代受苦」が「忍苦」と言い換えられている点から、同じ初期大乘経典である『無量寿経』の「忍」に着目した。しかし、法蔵菩薩が衆生のために「忍んで苦を受ける」という意味で「忍」が用いられているのではないことが判明した¹⁸。

5、代受苦の類似概念

さらに、菩薩が衆生に代わって苦を受ける概念として、次の三点を概観する。

『大智度論』の最高のくらいに至っても衆生の最後の一人まで悟らしめないうちは涅槃に入らない「不住涅槃 (apratisthitanirvāṇa)」。慈悲ゆえに故意に自らの意思を持って進んで苦悩の存在に生を受ける『大乘莊嚴経論』の「故意受

生 (saṃcintya-bhavopapatti)」。『撰大乘論』で苦を忍んで受けるという意味で説明される「安受苦忍 (duḥkha-adhivāsana-kṣānti)」などが「代受苦」に類似する概念と考えられる。各々の文脈で苦を受ける主体を確認したい。

『大智度論』に菩薩の不住涅槃 (apratīṣṭhitanirvāṇa) の思想が描かれている。

問う。もし菩薩、一切法中に著さず。何ぞ涅槃に入らざるを得ん。

答える。是の事、處處すでに説けり。今此の中に略説す。

大悲心の故に、十方佛を念ずるが故に。本願未だ満さざるが故に。精進波羅蜜の力の故に。般若波羅蜜と方便の二事が和合するが故に。いわゆる、不著において著せざるが故に。如是等の種種の因縁の故に。菩薩は諸法に著せずといえども、而も涅槃に入らず¹⁹。

菩薩が執着することなく、自分が涅槃に入らずにどうして他者を救うことができるのかを尋ねられた際の返答である。いくつかの理由の筆頭に大悲心が挙げられ、衆生を救うために意図的に安住の涅槃に入ることを拒否していると示す。ここにも大悲心が登場し、潜在的な代受苦の動力因と認めることができる。

『大乘莊嚴經論』には、慈悲ゆえに故意に自らの意思を持って進んで苦悩の存在に生を受ける「故意受生 (saṃcintya-bhavopapatti)」という語があり、菩薩のあり方として普遍化されている。長尾雅人氏の解説を引用する。

菩薩としての存在には、物理的な、あるいは輪廻的な業の結果ではなく、自らの意思を以って故意に煩惱を保留してそれによって輪廻の世界に姿を表すということがある。このような力があることは、恐らくもとそれが自性身の空性によるから可能なであろうが、あえて生を享けるということは、輪廻の中の衆生に対する慈悲にもとづくのである²⁰。

菩薩が衆生のために慈悲を持って輪廻の中に飛び込み生まれ変わることを「故

意受生」という。もちろん菩薩は、結果として衆生を救済する展望があるが、代受苦のように直截的ではないことがわかる。本箇所でも慈悲が動力として指摘されている。

同じ玄奘訳の『撰大乘論』には「安受苦忍 (duḥkha-adhivāsana-kṣānti)」という表現がある。それは、大乘菩薩行の徳目である六波羅蜜のうち忍辱波羅蜜について説明を付す箇所に登場する。忍について3種類あるといい「害を与えられて耐え忍ぶ忍耐 (耐怨害忍)」「苦を忍んで受ける (安受苦忍)」「存在の法について深く考察する忍耐 (三諦察法忍)」を列挙する。最初のものは他からの迫害を忍んで衆生を成熟させる意味で、安受苦忍は、寒熱や病苦を忍んで悟りを求め不退転であることを意味するという²¹。菩薩自身が修行の徳目の一つとして衆生の苦を忍んで受けるのであり、その忍を得て菩薩自身が不退転の状態にあることを表している。つまり、衆生の苦を受ける準備を万全に整えている状態で、代受苦のように衆生をそのまま涅槃に導くものではなさそうである。

このように、代受苦と類似する菩薩に備わった性質を概観すると、菩薩の衆生への態度として2種あることが伺える。「不住涅槃」と「故意受生」は、涅槃に入らず救済対象と同じ目線に立つことが目指されている。救済のために何か威神力を用いるのではなく、衆生と共に生きるという選択を示している。また「忍」の表現にはおおよそ、菩薩が生きる中で成就すべきことが現れている。つまり、菩薩が不退転の境地に至るため具体的にクリアすべき課題であり、菩薩としての備えるべき条件ということができよう。

これらと地獄をはじめとした三悪道に墮ちるものの苦を引き受ける「代受苦」表現とを比べた場合、主体は菩薩で、救済対象は衆生であるという点においては同じである。ただし、代受苦には「不退転を得るための菩薩の修行の一つ」という定義はなく、違いが顕著であるとも言える。

6、おわりに

「代受苦」は、現代のメディアで用いられるほど仏説としては定着していな

かったと推測される。代受苦の起点を確かめるために使用例を確認したが、漢訳經典に「代受苦」はほとんど用いられていないからである。それぞれの箇所には、菩薩が衆生に代わって苦を受け、救済対象の衆生は三悪道から悟りの世界への救済を説明する場面で「代受苦」が用いられていたことがわかる。

仏説は、初転法輪から苦を正しく認識すべきことを示している。苦を引き起こす欲望を制御する主体は修行者自身であった。修行者の理想像とされる菩薩の登場と修行体系が発展する中で、菩薩が備えるべき主要なものとして大悲心が挙げられていた。そのはたらきの一部に、地獄の境涯に堕ちた衆生に代わって苦を受ける「代受苦」表現が登場した。

換言すれば、仏説によって衆生は「苦」を丸抱えした存在であることを知らされる。菩薩は、自身の苦を減すること（向上）に加えて、他者の苦を軽減する役割（向下）も担っていく。菩薩の側は他者の苦を軽減するために「忍」を備え、意図的に「受生」するなど、いくつかの救済手段を保持している。あるいは、地獄に堕ちるような我々の存在自体が仏の大いなる願いや慈悲によって包摂されていることを知らしめるという変異も描く。このような豊富な衆生救済のバリエーションが大乗の名を正統なものにしていると言えるのではないだろうか。

仏典中の「代受苦」は使用例が少ない以上、共通点や統一的な見解を示すことは難しい。それでも拮がった解釈と変容は、中国撰述の仏典の使用例や更なる類似概念を検討しなければならないことがわかった。本稿は「代受苦」の周辺事項の用語を大乗經典論書から抽出し表層を概観したに過ぎず、今後の課題はむしろ多く残された。それでも、少なくとも現代の「代受苦説」にあるような非業の死者に「苦」が託されたという意味合いは仏説ではないことが理解していただけるだろう。

【参考文献】

- 稲城選恵 1999 『聖典セミナー 無量寿経』本願寺出版社
 石上和敬 2012 「〈悲華経〉の研究：釈迦五百誓願を中心として」学位論文
 金澤 豊 2021 「漢訳仏典における「代受苦」その主体と対象をめぐって」『真宗学』

第 143/144 合併号

- 金子大榮 1965 「受苦と随喜と尊重」(初出 1925 年)『仏教／現代日本思想大系』通号 7
- 戸田裕久 2009 「廻向と代受苦-『華嚴経』「十廻向品」を中心に』『佛教學』51
- . 2010 「廻向と代受苦-拔苦・受苦・忍苦の菩薩行に関する一考察』『法華文化研究』36
- . 2011 「大智度論における代受苦』『インド仏教史仏教学論叢』山喜房仏書林
- 長尾雅人 1978 『中観と唯識』岩波書店
- . 1987 『撰大乘論 和訳と注解』講談社
- 早島 理 1998 「苦悩の分析『顕揚聖教論』「成苦品第五」第 1-13 偈の解説研究』長崎大学教育学部社会科学論叢、第 56 号
- . 1999 「苦悩の分析『顕揚聖教論』「成苦品第五」第 14-20 偈の解説研究』長崎大学教育学部社会科学論叢、第 57 号
- 平岡 聡 2020 『菩薩とはなにか』春秋社
- 藤田宏達 2007 『浄土三部経の研究』岩波書店

註

- 1 平岡 聡 2020、pp.153-197
- 2 金子大榮 1965
- 3 「代受苦」検索を実行すると Google では約 3 万件がヒットする。
- 4 金澤 豊 2021
- 5 大慈与一切衆生樂、大悲抜一切衆生苦(『大智度論』大正蔵 25、p.256 b)『中論頌』第 12 章においても「苦」を主題とし、部派仏教の一つ犢子部の主張する苦の実存的なあり方を 10 の偈頌で退けている。
- 6 早島 理 1998、1999 による解説研究を参照した。
- 7 戸田裕久 2010、p.26、石上和敬 2012、p.104
- 8 なお「代苦」は大正蔵データベースによると 24 の仏典に 43 箇所出現する。ただし密教部の密教経典 1 箇所と論書、註釈書類に集中し、インド選述の阿含、大乘の経典には登場しない。
- 9 「苦を代わる」を意味する「代苦」が 43 件のみで、密教部「代苦観自在」と名付く菩薩に一箇所、『十地経論』に一箇所「代苦利益」という固有名詞がある他は、中国撰述の疏類にその使用例が集中する。このように「苦を代わる」という表現が極めて限定的であることも判明する。
- 10 云何菩薩入大悲心。若菩薩如是念我爲一一衆生故。如恒河沙等劫地獄中受勤苦。乃至是人得佛道入涅槃。如是名爲一切十方衆生忍苦。是名入大悲心。(『大品般若経』大正蔵 8、p.258 a, b)
- 11 入大悲心者。如先説。此中佛自説。本願大心爲衆生故。所謂爲一人故。於無量劫代受地獄苦。乃至令人集行功德作佛入無餘涅槃。(『大智度論』大正蔵 25、p.414 b)

なお『大智度論』に現れる代受苦思想は戸田裕久 2011 によって詳細に検討されている。

- 12 なお 10 種の普賢心として挙げられるのは、大慈心、大悲心、一切施爲首心、正念一切智爲首心、功德莊嚴心、金剛心、大海心、須彌山王心、安隱心、究竟般若波羅蜜到彼岸心。
- 13 我作佛時。他方世界諸菩薩。聞我名號歸依精進。即得至第一忍第二忍第三法忍。於諸佛法永不退轉。不得是願終不作佛。（『無量壽經』大正蔵 12、p.330 b 2-5）

14 藤田宏達 2007、pp.319-329

- 15 微風徐動出妙法音。普流十方一切佛國。其聞音者得深法忍。住不退轉。至成佛道。不遭苦患。目觀其色。耳聞其音鼻知其香舌嘗其味。身觸其光。心以法緣。一切皆得甚深法忍。住不退轉至成佛道。六根清徹無諸惱患。阿難。若彼國人天。見此樹者得三法忍。一者音響忍。二者柔順忍。三者無生法忍。此皆無量壽佛威神力故。本願力故。滿足願故。明了願故。堅固願故。究竟願故。（『無量壽經』大正蔵 12、p.271 ab）書き下しは『浄土真宗聖典（註釈版）』pp.33, 34 による。同書には、深法忍は無生法忍のことで、これをもって三法忍を代表させるものとみられると脚注がある。

古訳の『大阿弥陀經』にも同様の「深法忍」の説明が存在する。

若有衆生。觀想樹者乃至成佛。於其中間心得清涼。遠離貪等煩惱之病。皆得甚深法忍。住不退轉地。彼利諸天人世人。見此樹者得三法忍。一者音響忍。二者柔順忍。三者無生法忍。如是樹木花果。與諸衆生而作佛事。皆以此佛本願力故。堅固願故。精進力故。威神力故（『大阿弥陀經』大正蔵 12、334 a 13-15）

16 稲城選恵 1999、pp.87-90

- 17 『月燈三昧經』『悲華經』もまた第一忍、第二忍、第三忍という形式を説く。しかし、それらの忍を得ることで不退転（阿鞞跋致）の境地に至るのではなく、阿耨多羅三藐三菩提に至ることが示されており、初期大乘經典における忍の果に関する検討は今後の課題としたい。

童子。是故菩薩摩訶薩應善巧知入三法忍。謂知彼第一忍第二忍第三忍。於是忍中應善巧知。復於其智亦善巧知。何以故。若菩薩摩訶薩於忍智中善巧知者。彼菩薩摩訶薩速得阿耨多羅三藐三菩提。是故童子。菩薩摩訶薩若欲速求阿耨多羅三藐三菩提者。於此三忍法門應當受持。持已爲他廣分別説。利益安樂無量衆生救濟世間。利益安樂諸天及人。爾時世尊。爲彼月光童子。即以偈句。頌此入三忍法門。（『月燈三昧經』大正蔵 15、p.556 a）

願我成阿耨多羅三藐三菩提已。其餘無量無邊阿僧祇世界。在在處處諸菩薩等聞我名者。即得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。得第一忍第二第三有願欲得陀羅尼及諸三昧者。如其所願必定得之。（『悲華經』大正蔵 3、p.184 b）

- 18 なお、不退転の状態をもたらす無生法忍は『大智度論』「積偏學品八十六」の中で3つの観点から説明されている。

①作仏するまで常に悪心を生ぜず。この故に無生忍という

②この忍を得れば、一切法の畢竟不生を觀じて、縁を断じて心、心数生ぜず。これを無生忍と名づく

③能く声聞や辟支仏（独覺）の智慧を過ぐるを無生忍と名づく

無生忍者佛後品中自説。乃至作佛常不生惡心。是故名無生忍。論者言得是忍觀一切法畢竟空。斷縁心心數不生。是名無生忍。又復言能過聲聞辟支佛智慧名無生忍。（大正蔵 25、p.662 b-c）平岡聡 2020、p.132 参照。

ここから、悟りの条件としての「忍」を得て、不退転の境地に入った菩薩が大悲心によって「代受苦」をなすという見通しが立つように思われるが、仮説の域をでない。本節は、「忍苦」に関する一旦の問題提起とし別稿にて他の経論を引き続き精査したい。

- 19 問曰。若菩薩一切法中不著。何得不入涅槃。答曰。是事處處已説。今此中略説。大悲心故。十方佛念故。本願未滿故。精進波羅蜜力故。般若波羅蜜方便二事和合故。所謂不著於不著故。如是等種種因縁故。説菩薩雖不著諸法而不入涅槃。（大正蔵 25、p.319 a, b)
- 20 長尾雅人 1978、p.278 を参照した。また、同ページ注釈には「故意受生」が、諸『般若経』、『大乘莊嚴経論』、『撰大乘論』に用いられており、『成唯識論』の「故意方行」や「留煩惱障、助願受生」も同じ意味であろうと推測する。
- 21 玄奘訳『撰大乘論』（大正蔵 31、p.145 a）真諦訳『撰大乘論』も同じ訳語を採用している。六波羅蜜の一々を 3 種に分類して説明する方法は『瑜伽師地論』撰決択分菩薩地でも採用され、禪定、般若に関しては異なるが、布施と戒と、ここで注目した忍辱に関しては全く同内容であるという。長尾雅人 1987、p.144（注 1）